

一般部門

一般部門 優秀賞

心で食べたバースディケーキ

【新潟県・福原^{ふくはら}きみ子】

次男が14歳の時、長岡赤十字病院に入院しました。病名は「急性リンパ性白血病」。約8カ月に及ぶ、死と隣り合わせの長く苦しい闘いでした。息子のそばで見守ることしかできなかったつらい毎日、先生や看護師さんたちの優しさにどれほど助けられたかわかりません。

幸い、夫の弟から骨髄移植を受けることができ、無菌室での生活が始まりました。病室の外側の廊下から、ガラス窓越しに様子を見守る日々。苦しむ息子に何もしてあげられない私は、息子の様子を見守りそっと背中をさすってくださる看護師さんに感謝しながら過ごしていました。

そんなある日、私のいる廊下に3、4人の看護師さんが入って来られ、息子の部屋の窓ガラスに、色画用紙を切って作った花束とケーキを貼ってくれたのです。その日は息子の15歳の誕生日でした。びっくりして照れくさそうに笑っている息子にインターフォンで「ハッピーバースディ」を歌ってくれました。それからお祝いと励ましの言葉を代わる代わる言ってくれたのです。

そのころの息子は治療の副作用でケーキは言うまでもなく、病院の食事さえもあまり食べられずにいました。でも紙で作られた大きなバースディケーキは、息子の心にしっかりと入っていったと思います。私は息子の前では絶対に見せないと決めていた涙を、その時ばかりは抑えきれませんでした。息子にとっても一生忘れられない誕生日になったと思います。

温かな、心のこもった看護のおかげで無事退院し、あれから9年。息子は社会人として元気に過ごしています。あの時いただいた花束とケーキは、友達が贈ってくれた千羽鶴と一緒に、大事な宝物として今も大切にしまっています。